2023年10月22日 久宝教会 収穫感謝礼拝メッセージ

「賜物を活かす」　　牛田匡牧師

聖書 ルカによる福音書 19章 11−27節

今日は収穫感謝礼拝です。保育園でも子どもたちがお芋掘りに行ったりしていますが、近隣の田んぼや畑でも秋の実りを感じる季節となりました。先程歌った賛美歌「わたしたちのたべるもの」では、食べるものを育ててくれた神様に感謝、それから作ってくれた人たちに感謝するということ。さらにそれらの収穫は、みんなで分かち合って頂くものであって、決して独り占めするものではないですよ、ととても分かりやすく歌われていました。

農業の経験がある方にとって、農業は人間の力だけではどうしようもない、気象条件による部分が大きかったり、また自分一人だけではなく大勢の人の協力が必要な作業があったり、多くの方々の「お陰様」の末に豊かな収穫があるということが、体験として実感されていることではないかと思います。しかし、資本主義が進み、分業が進み、人々の生活がそのような直接の生産現場から離れ、「食べ物はお金を出して買うもの」という意識だけになってしまっていると、そこからは「お陰様」という考え方は失われてしまうのではないかと心配します。

そもそも私たちは食べること無しに生きていくことは出来ません。生き物がその命を維持していくために食べ物は不可欠ですから、「食べ物を作る農業は、隣り人の命を生かす仕事である」とも言われます。ですから、言い換えるならば、私たちが日々に生きているということ、食べるものが与えられているということは、それ自体が決して当たり前のことではなく、神様を始めとして、実に多くの方々の働きによって与えられ、支えて頂いている「有り難いこと」なのだと言えるのではないでしょうか。秋の実り、収穫を感謝する時に、それらのことを改めて心に留めたいと思います。

さて、今回の聖書のお話は、聖書協会共同訳聖書には「ムナのたとえ」という小見出しが付けられているイエス様のたとえ話でした。あるお金持ちの主人が旅に出るに際して、僕(しもべ)たちにまとまったお金を預けて行きました。それぞれの僕(しもべ)たちはそのお金を元手にして商売をしたりして、さらにお金を儲けて、帰って来た主人に

褒められました。ですが、資金運用で失敗することを恐れたのか、そのお金を活用しなかった一人の僕(しもべ)は「役に立たない悪い僕(しもべ)だ」として叱られたというようなお話です。お金の単位などが若干異なりますが、「マタイによる福音書」25 章にある「タラントンのたとえ」(14−30 節)の方が有名かと思います。テレビなどに登場する芸能人たちを、日本語では「タレント」と呼びますが、「タレント」という英語の元々の意味は「才能のある人」という意味で、この聖書の話に由来しています。神様である主人から私たち一人一人は多くのタレント、才能や賜物を頂いている。だからそれを一生懸命に活用して、世のため人のために役立てて、いっぱい増やして行きましょうね。そうしたら神様がたくさん褒めてくれます。逆に折角、神様から与えて頂いた賜物を活用しないで隠しておくことはないようにしましょうね、というように理解されて来たように思います。確かに、現代を生きる私たちにとって、そのような理解はとても分かりやすいように感じます。しかし、2000 年前に、実際イエス様が、当時の人々に語りかけられ、伝えられたことは、本当にそのようなことだったのでしょうか。聖書の言葉を丁寧に読むと、実は違っていたのではないか、と思わされます。

例えば、このたとえ話に出て来る主人を、様々な才能や賜物を与えて下さる天の神様だと考えた場合、14 節の「その国の市民は彼を憎んでいた」という言葉や、最後の 27 節の「私が王になるのを望まなかったあの敵どもを、ここに引き出して、私の目の前で打ち殺せ」という言葉は、どのように理解したらよいのでしょうか。またそもそも「1 ムナ」で「10 ムナ」儲けたり、「5 ムナ」儲けるとは、どういうことなのでしょうか。商売や資産運用で失敗して、主人から預かったお金を減らしてしまうリスクを考えると、減らさないように大切に保管しておいて、耳を揃えてお返しすることは悪いことだとも言えないのではないでしょうか。「1ムナ」というのは、ギリシャの銀貨で 100 日間分の日当に相当する金額だったそうですから、今で言うと 50 万円や 100 万円という金額でしょうか。しかし、当時の庶民や一般労働者たちにとっては日々の糧を得るために、日当はすぐに物に交換されていたでしょうし、田舎の村々ではそもそもお金に依存しない形で、物々交換も多かったでしょうから、このお話に出て来る「1 ムナ」も、庶民の生活からはかけ離れた「大金」という意味で用いられたのだと思います。では、そのような庶民の生活背景の中で、主

人から預かった「1 ムナ」を使って、「10 ムナ」や「5 ムナ」を儲ける商売とは、一体どのようなものだったのでしょうか。恐らく、それは汗水たらして「一個幾ら」の物をたくさん販売する仕事というよりは、まさに 21 節にあるような「預けなかったものも取り立て、蒔かなかったものも刈り取る」ような、人々を搾取する方法だったのではないかと思われます。

12 節にある「ある身分の高い人が、王の位を受けるために、遠い国へと旅立つことになった」というのも、神様ご自身のこととして読むと、神様が一体どこに行って、誰から位を受けるのかと不思議に思いますが、当時のユダヤの領主が、ローマ皇帝から「王位」「自治権」を認証してもらおうとしていたこと、またそのようなヘロデ家の支配に対する反対勢力があったことを考えると、ここにはそのことが記されているのだと考えられます。そのように考えた時、イエス様が当時の社会の中で財産も権力も何も持っていない、弱く小さくされた人たちにこのたとえ話で伝えたことは、ローマ皇帝の認可、お墨付きを得た主人である領主ヘロデに褒められた僕(しもべ)のように、庶民からお金をむしり取って金儲けしなさいということではなく、26 節にある「誰でも持っている人は、さらに与えられるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられる」という不公平な世界、神の正義と公正が全く実現していないおかしな現実の中でも、資本主義という流れにただ流されていくのではなく、黙って搾取され続けて行くのではなく、「おかしいものはおかしい」「不正は不正だ」と声をあげていくこと、権力者に対して「あなたは預けなかったものも取り立て、蒔かなかったものも刈り取られる」冷酷非道な方だと臆せず、糾弾していくことだったのではないかと思います。

その意味で、天の神様、命の神様から私たち一人一人が与えられている「賜物を活かす」とは、「才能を活用して、お金儲けをして成果を出す」ということではなく、むしろ「今、言うべきことを言い、為すべき事を為す」ということなのではないでしょうか。そのためには正面から権力に向かい合い衝突を免れないという道だけではなく、この世を生き抜く知恵を働かせて、仲間たちと共にしたたかに生き続けることが求められているのではないかと思います。

お互いの命を活かし合い、支え合うための収穫物を感謝するこの時に、中東で

は日々多くの人たちの血が流され、緊迫した状況が続いています。2 週間前の今月 7 日にパレスチナ自治区のガザ地区から過激派組織ハマスによって、イスラエルにミサイルが撃ち込まれてから、双方での戦争が続けられ、既に死者は 5000 人を超えると報じられています。1948 年に現在のイスラエル国が、第二次世界大戦の戦勝国を中心にして恣意的に建国されて以来ずっと、争いは続き、度重なる中東戦争で多くの人々の血が流され続けてきました。そのような中で暴力と憎しみが、負の連鎖となって、過激派組織が生まれ、またパレスチナ自治区を包囲する巨大な壁が作られています。

連日のニュースでも報じられていますが、ガザ地区には 220 万人の人々が暮らしているそうです。大阪市の人口より 1 割 2 割少ない位、丁度名古屋市の人口と同じくらいの人々が種子島と同じ面積の場所に密集して暮らし、世界で一番人口密度が高い地区となっているそうです。イスラエル国との関係が悪化している事から、電気にも上下水道にも事欠き、世界各国からの支援物資によって、何とか命をつなぐことだけは出来ているけれども、他には何も出来ない状態、まさに「天上のない監獄」なのだそうです。そのような絶望の中に生まれ育った人たちにとっての生きるよすが、希望とは一体何なのでしょうか。暴力と憎しみの連鎖にますます拍車がかけられているように感じます。

先日 17 日には、日本キリスト教団でも支援が続けられて来ていたガザ地区にある「アル・アハリー病院（聖公会／バプテスト病院）」が爆撃されました。水も食料も足りない中、医療機関まで破壊されるという事態に、国際的にも批難が高まっていますが、18 日の国連安全保障理事会では、アメリカの拒否権行使によって、一時停戦が採決されませんでした。本当に悲しいことです。

聖書は一貫して私たちに対して「あなたは命を選びなさい」（申命記 30：19）と言っています。私たちの命をつなぐ秋の実り、様々な収穫物を前にしながら、食料も水も届けられない人々が、この地球上にいること、また命を傷つけ破壊する戦争が続けられていることを、私たちはどのように受け止めたらよいでしょうか。この地上に一刻も早く平和を実現するために、私たちの賜物を活かすこと、そのために私たちは今日も祈り求め、そしてそれぞれの場にあって、今なすべきことをなしながら、用いられて参ります。